

日韓初対面接触会話におけるポライトネス・ストラテジー —オーバーラップ発話に注目して—

林 河運

1. はじめに

会話には必ず話し手と聞き手がある。聞き手は話し手の発話内容に対して言語的に・非言語的に反応し、会話進行に介入する。この聞き手の反応は、会話進行に直接・間接的に影響を与える重要な働きをするものである。会話がスムーズに流れるためには、いくつかの話順取り (turn taking) の規則があるとされており、Martin Bygate (1987) によると、適切な話順取りの正しい瞬間を把握することを上手な話順取りの方法としている。具体的に言うと、話者の発話が終了される前に話順取りのチャンスを逃さないための正しい順番を取ること、他者の発話希望をキャッチできること、他者の話順取りを許容することなどである。しかし、Renkema, J (1993) はこの規則に対して、会話においてどの規則が適用されたのか区別できない場合が多く、数多い発話文の中で話順を割り当てる地点は明確ではない、会話は単純に話順だけで成り立つものではないと指摘している。実際、会話そのものは非常に不規則的かつ流動的であるため、このような話順取りの規則を厳格に守ることは無理に等しく、むしろその流動性こそが会話の中で様々なストラテジーを引き起こす要素であると考えられる。

そこで本研究では、会話の流れに沿って織りなされる話し手、聞き手のストラテジーのうち、話者交替の際に生じるオーバーラップ発話に注目し、日韓両言語の初対面接触会話におけるオーバーラップ発話の様相とその機能性をポライトネスの観点から分析する。

2. 本研究における「オーバーラップ発話」の定義

実際の日常会話では Sacks ら (1973, 1974) の主張¹とは異なり、以下の会話例 (1) のように一人の発話者の発話一部または全体が他発話者の発話と重複してしまうことがよくある。

(1) <日韓初対面接触会話>

J: ある程度まではいっても,,

K: そうですね。

J: そこから停滞して、すこしふっとあがる時があるっ

K: 〔てきいた##,, 勉強しないと ふっとあが

らないと思う〕

J: 〔あ、ま、確かにハハ。

¹ Sacks & Schegloff, Jefferson (1973, 1974) によると、会話は一つの単語、一つの文、一つの物語などで構成される基本単位の終わりそうな場で交替が行われ、一度に一人ずつ話すのが会話の原則であるとしている。

K：勉強っていうのを、(あー) 今工学部なんで、
 J：あー。
 K：ぜんぜん、
 J：ちょっとちがう。
 K：する機会もないし、(あー) しようとするのも、ない、
 J：あううん。
 K：ですね。
 J：あー、そう、専攻が工学部なんですね。
 K：そうですね。
 J：私の友達も〔そうかも。
 K： 〔じん・ まえ、
 J：うううん。
 K：人文学部の、
 J：うんうん。
 K：授業取ったとき、
 J：はいはい。
 K：工学部の授業と全然違って、(あー) 人文学部だと、
 J：そうかー。
 K：確かに、ぶんしょとか読む、(あー) ことが多く、
 J：うううん。
 K：漢字のほうも、
 J：うううん。
 K：分からない漢字がいっぱい、
 J：そうですね。
 K：あったんです。
 J：うううん。




上記の会話のようにある一時点において二人の話者が同時に話をし、二人の発話の一部または全体が重複 (overlap) することを指してオーバーラップ発話と呼ぶことにする。

3. オーバーラップ発話の判断条件

本節では、都 (2003、2004) の分類を援用し、オーバーラップの種類の見別条件について述べよう。見別方法は四段階に分かれており、第一段階、オーバーラップ発話の形式からあいづち発話と実質発話の組み合わせを区別すること、第二段階、オーバーラップ発話による発話の中止があるかどうかを見極めること、第三段階、中止後の修復や続きの有無を見分けること、第四段階、オーバーラップ発話前後の話題の類縁性を考えること、このような重層的なプロセスによってオーバーラップ発話を体系的に分類することができる。

オーバーラップ発話をめぐる弁別条件を一言で言うと、重ねられ手に対して積極的に働くか、重ねられ手の話の調子に合わせて好意的に働くか、すなわち、重ね手の自己発話の優先的なオーバーラップ発話であるか、重ねられ手発話の配慮的なオーバーラップ発話であるかで大別される。換言すると、会話を自ら主導的に導くためのオーバーラップ発話であるか、相手に調和して協力的に導くためのオーバーラップ発話であるかに関わる。詳細は、<表1>に会話へのオーバーラップ発話の影響を分かりやすくするために、会話の主導性、協力性を軸にそのポライトネスへの度合いを分類する。

<表1>オーバーラップ発話の影響

第一段階 どのような発話形式が重なるか	ポライトネスへの働き方の度合い
<ul style="list-style-type: none"> ・ 実質発話と実質発話のオーバーラップ発話系 ・ 「実質発話が重なる混合系」² ・ 「あいづちが重なる混合系」³ ・ 混合発話のオーバーラップ発話系 ・ あいづちとあいづちのオーバーラップ発話系 	重ね手の pos・face に対して積極的 重ね手が主導的  重ねられ手の neg・face に対して積極的 重ねられ手に対して友好的・協力的
第二段階 重なった後、発話の中止があるか	ポライトネスへの働き方の度合い
<ul style="list-style-type: none"> ・ 重ねられ手中止 ・ 両方中止あるいは中止なし ・ 重ね手中止 	重ね手の pos・face に対して積極的 重ね手が主導的  重ねられ手の neg・face に対して積極的 重ねられ手に対して友好的・協力的
第三段階 中止発話の修復または継続があるか	ポライトネスへの働き方の度合い
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己修復（重ねられ手修復）あるいは重ね手継続 ・ 修復なし ・ 相手修復（重ね手修復）あるいは重ねられ手継続 	重ね手の pos・face に対して積極的 重ね手が主導的  重ねられ手の neg・face に対して積極的 重ねられ手に対して友好的・協力的

² 「あいづちと実質発話」、「あいづち+あいづちと実質発話」、「実質発話+あいづちと実質発話」の3種類を「実質発話が重なる混合系」と呼ぶことにする。

³ 「実質発話とあいづち」、「実質発話+あいづちとあいづち」、「実質発話+あいづちとあいづちと実質発話」の3種類を「あいづちが重なる混合系」と呼ぶことにする。

第四段階 オーバーラップ発話前後、話題の関係はどうか	ポライトネスへの働き方の度合い
・ 話題転換 ・ 話題拡大 ・ 話題維持	重ね手の pos・face に対して積極的 重ね手が主導的 ↓ 重ねられ手の neg・face に対して積極的 重ねられ手に対して友好的・協力的

注：都（2004：208）にあるものを筆者が少し修正加筆したものである。

4. 会話資料と分析方法

4.1 会話資料

本研究では同年代の初対面同士の会話を、各々の初対面の2人組にボイス・レコーダを渡し、自己紹介から始めて自由に会話をしてもらい、それぞれ約10分から31分間の会話を2005年3月から2007年3月にかけて収集した。

なお、初対面会話のインフォーマントは、日本人19名（男性5名、女性14名）及び韓国人20名（男性14名、女性6名）に依頼して行った。採集した言語は日本語と韓国語であり、日本語母語話者のデータは日本語で、韓国語母語話者のデータは韓国語で収集した。また、インフォーマントの年齢は20才～28才と限定しているし、会話資料を収集した時点では全員20代の大学・大学院生である。

インフォーマントの詳細については以下の<表2>に示す。

<表2>初対面接触会話資料の組み合わせ

	場 面	ベース	対話相手	会話数
会話 21	接触会話	JFA(27才)	KFA(27才)	10 会話
会話 22		JFA(27才)	KFB(27才)	
会話 23		JFA(27才)	KMA(25才)	
会話 24		JFA(27才)	KMB(24才)	
会話 25		JMA(24才)	KMC(23才)	
会話 26		JMA(24才)	KFC(24才)	
会話 27		JFB(21才)	KFA(27才)	
会話 28		JFB(21才)	KMD(23才)	
会話 29		JFB(21才)	KMA(25才)	
会話 30		JFC(21才)	KMA(25才)	

注：話者記号は3文字で表す。初めの記号は国籍で、Jは日本を、Kは韓国を表す。次の記号は性別で、Fは女性を、Mは男性を表す。最後のアルファベットは通し番号を示す。なお、■はベースのインフォーマントのうち、複数調査したことを示す。

4.2 分析方法

4.2.1 文字起こし

上記の方法で収集された会話資料の文字化及び分析の処理は、宇佐美（2003）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）」に基づいておこなったが、一部筆者が修正した。会話の文字化は、日本語と韓国語ともに2次チェック⁴までおこなった。主な記号は以下のとおりである。詳しくは宇佐美（2003:4）を参照されたい。

<記号凡例>

BTSJ で用いられる記号を以下にまとめる。はじめに、BTSJ に基づいて文字化する際の基本的な記号を挙げる。しかし、BTSJ はその名の通り、「基本的な文字化の原則」であり、特定の研究の目的に応じて、例えば、より詳細な音声情報を付加するなど、BTSJ を基本にしつつも、特定の目的に適した独自の記号を設けることを奨励するものである。

., 発話文の途中で相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。

? ? 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。

↑ → ↓ イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、↑, →, ↓ を用いる。

→ 質問と自己開示による話題導入や友人同士の話題導入の発話文に → つける。なお、その話題導入の発話文すべてを太文字に表す。

・・・ 文中、文末に関係なく、音声的に言い淀んだように聞こえるものにつける。

【 【 】 第1話者の発話文が完結する前に、途中で挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合は、「【 【 】」をつける。結果的に終了した第1話者の発話文の終りには、【 【 をつけ、第2話者の発話文の冒頭には】】をつける。

聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、# マークをつける。

⁴ 文字化資料のチェックはもう二人の大学院生（日本人・韓国人各一名）と一緒にいった。なお、日本語は日本語母語話者に、韓国語は韓国語母語話者にチェックしてもらった。

= = 改行される発話と発話の間（ま）が、ほとんどか全くないことを示す。

[複数行に跨る括弧は会話参加者たちの発話が重なっていることを示す。
(筆者独自の記号である)

波線 発話者が笑いながら話していることを示す。(筆者独自の記号である)

傍線 通常より小さな声で話していることを示す。(筆者独自の記号である)

傍線 通常より大きな声で話していることを示す。(筆者独自の記号である)

. h h 吸気音は、.hh で示される。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
(筆者独自の記号である)

ABC 会話の途中に出てくる「ABC」のようなアルファベットは人名や知名など、被験者のプライバシーの保護のために、イニシャルとして示す。
(筆者独自の記号である)

出典：宇佐美（2003）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ：以下、BTSJ）」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成 13 - 14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C（2）（研究代表者：宇佐美まゆみ）、研究成果報告書、pp.4-21 から抜粋。

5. 「初対面接触話者同士の会話のデータ」の分析及び考察

5.1 初対面接触会話のオーバーラップ発話の頻度

本節では、日韓初対面接触会話のオーバーラップ発話の頻度を示すことにする。詳細は、以下の<表 3>、<表 4>と図 1、図 2 のとおりである。

<表 3>日韓初対面接触会話のオーバーラップ発話の頻度の合計

話者区分	接触会話オーバーラップ発話の頻度	
	重ね手が 日本語母語話者	重ね手が 韓国人日本語学習者
合計	297 回	225 回

上記の<表 3>、下記の図 1 から分かるように、日韓初対面接触会話でも日本語母語話者のオーバーラップ発話の頻度が若干上回っていることが見て取れると思う。つまり、母語話者同士間の結果を裏付ける結果となった。

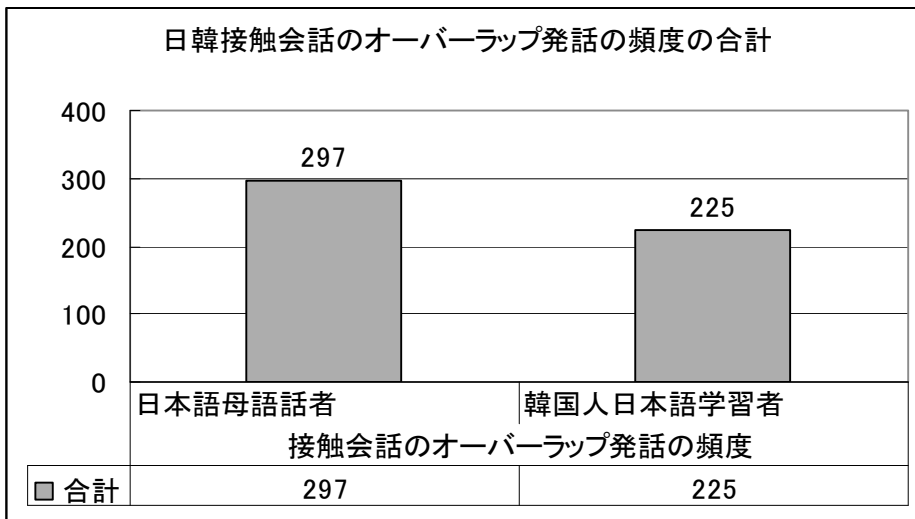


図1. 日韓接触会話のオーバーラップ発話の頻度の合計

<表4> 日韓初対面接触会話のオーバーラップ発話の頻度

区 分	オーバーラップ発話の頻度	
	日本語母語話者	韓国人日本語学習者
実質発話+実質発話	34回	38回
実質発話が重なる系	44回	45回
あいづちが重なる系	168回	86回
あいづち+あいづち	51回	56回
合 計	522回	522回

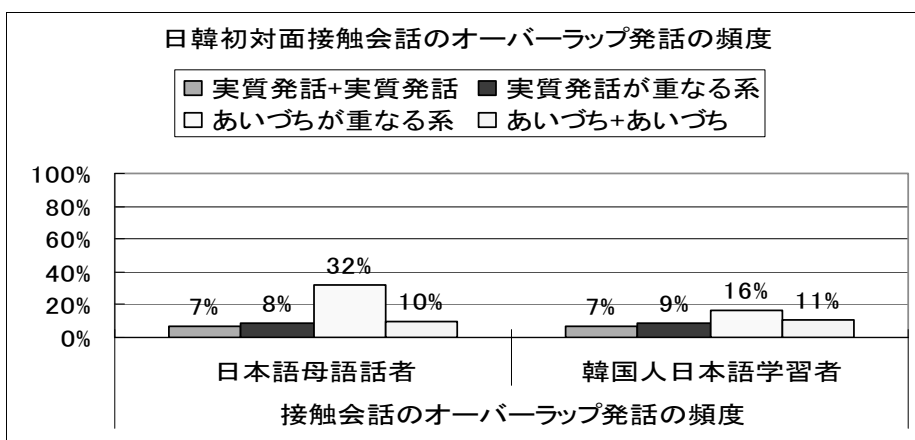


図2. 日韓接触話者同士のオーバーラップ発話の頻度

また、上記の<表4>、以下の図2からも分かるように、日韓初対面接触会話でも日本語母語話者のオーバーラップ発話は、「あいづちとあいづち」と「あいづちが重なる系」のだけで42%を占めているのがわかるかと思う。一方、韓国人日本語学習者のオーバーラップ発話は、「あいづちとあいづち」と「あいづちが重なる系」が27%であり、日本語母語話者より15%も下回っていることが観察された。なお、オーバーラップされて日本語母語話者が中止されているのに、韓国人日本語学習者が話題を転換するケースが86回のうち1回、話題を拡大して展開するケースが10回に対して、日本語母語話者はというと、話題を拡大して展開するケースが1回あるものの、話題を転換するケースは見られなかった。しかし、母語話者同士の結果とはやや違い、「実質発話と実質発話」と「実質発話为重なる系」のパーセンテージは日本語母語話者より1%しか差が見られなかった。これは、日本語の学習をしているので、多少影響を受けたものと見られるものの、相変わらず、日本語母語話者よりは重ねられ手に対して積極的に働き、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話であると考えられる。

5.2 接触会話の場合

林(2010, 2011)の結果から、日本人は重ねられ手の話の調子に合わせてできるだけ邪魔にならないように配慮するポライトネス・ストラテジーを、一方、韓国人は重ねられ手に配慮するのではなく、重ね手自身のポジティブ・フェイスにより多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーをとっていることが明らかになった。本節ではその結果を踏まえて、日韓初対面接触会話でも同様な結果が出るのか考察していきたい。まず、韓国人日本語学習者をみていき、その後、日本人の場合を見ていくことにする。

5.2.1 韓国人日本語学習者の場合

<会話29：第3者Lとどういう知り合いかを尋ねている場面>

KMA1：ど・どういう知り・合い・ですか？。＝

JFB1：＝あの一、じも・私地元NGであの一、テルサって分かりますか。＝

KMA2：＝あー。

JFB2：あそこ・、

→KMA3：かん　こくご。

JFB3：はい。

KMA4：そーですか。

JFB4：うちの母親と一緒に、ちよつと習った（ハハハ）ハハハはい。

KMA5：そすか。

JFB5：はい。

<会話29>から分かるように、重ねられ手であるJFB2の話が中止されているのに、

KMA3は「かんこくご」と先取りして自分の話を継続し、テーマを変えているのが分かるかと思う。これは、重ねられ手に対して積極的に働き、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話であると考えられる。つまり、重ねられ手のネガティブ・フェイス⁵とポジティブ・フェイス⁶に一応注意を払いながらもむしろ、重ね手自身のポジティブ・フェイス（「他人から好意を持たれ認められたい」）に積極的に働きかけるという、ポライトネス・ストラテジーをとっているのである。

<会話 23：JFAがKMAに日本のドラマと雰囲気が違うという話をしていた場面>

JFA1：雰囲気が違うし、音楽もあーいいなーと思いながら。

KMA1：音楽いいですよ。

JFA2：いいですよー、ほんとうに、

→KMA2： { テーマソング とか。

JFA3：かっこのいいなーと思って。

KMA3：はい。

<会話 23 >から分かるように、重ねられ手であるJFA2の話が中止されているのに、KMA2は先取りして「テーマソングとか」と具体的な例を挙げて自分の話を継続し、話題を展開しているのが分かるかと思う。これも、重ねられ手に対して積極的に働き、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話であると考えられる。つまり、接触会話でも韓国人は重ねられ手のネガティブ・フェイスとポジティブ・フェイスに一応注意を払いながらもむしろ、重ね手自身のポジティブ・フェイスに積極的に働きかけるという、すなわち、重ね手のポジティブ・フェイス（「他人から好意を持たれ認められたい」）により多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーをとっているのが観察された。これは、韓国人同士のポライトネス・ストラテジーを裏付ける結果となった。

5.2.2 日本語母語話者の場合

<会話 23：JFAがKMAに韓国語は難しいと話をしていた場面>

JFA1：旅行ぐらいは何とかなるけど、なかなかこー、コンタクトとって、ねえ↓、完全に意思の疎

⁵ 「ネガティブ・フェイス (negative face)」とは、「自分の領域 (テリトリー) を他人から侵されたくない」という欲求である。すなわち「ネガティブ・フェイスを尊重する」ということは、互いに距離を置きむやみに近づかないことを意味する。

⁶ Brown & Levinson(1987) は、人間の行動は普遍的なルールに基づいて行われ、そのルールの1つがポライトネスであるとしている。そして、人間の言語行動の基本原理を、人間関係をスムーズに維持するためのコミュニケーションのストラテジーと考え、これを Goffman(1967) のフェイスという概念を用いて論じている。さらに、このフェイスを「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」の2種類に分類している。

「ポジティブ・フェイス (positive face)」とは、「他人から好意を持たれ認められたい」という欲求である。すなわち文化の如何を問わず人は皆他人から「ほめてもらいたい、よい人間だと思われたい」と思っているのだ、その気持ちを互いに認めることが「ポジティブ・フェイスを尊重する」ことになる。

通って、日本語ができる人だと、とっても頼ってしまうので（ハハハ）、全部日本語でしゃべったりとか、勉強にならないねって言われたりするんですけど。

KMA1：そーすか。

JFA2：うーん、そうですね、難しい、発音とかがやっぱり・・・難しいです、

→KMA2：日本語に、
韓国人もそーうなんですよ、難しいです。

JFA3：あ、日本語の（うん）、そうですね。

KMA3：そーそー。

JFA4：あー。

<会話 23 >から分かるように、重ねられ手である JFA2 の話が中止されているのに、KMA2 は違うテーマに変えて自分の話を継続している。しかし、JFA3 は自分の話のテーマと変わったけど、それについて KMA2 を配慮し、KMA2 に話を合わせたのが分かるかと思う。これは、日本人同士と同様に、相手の話の調子に合わせて友好的に働き、相手発話の配慮的なオーバーラップ発話であると思われる。つまり、自分のポジティブ・フェイスに注意を払いながらもむしろ、相手の話の調子に合わせて相手のネガティブ・フェイス（「自分の領域（テリトリー）を他人から侵されたくない」）に積極的に働きかけるという、ポライトネス・ストラテジーをとっているのである。

<会話 21：KFA が JFA に何年生かを聞いている場面>

JFA1：むずかしで #、調査とかが大変、なんじゃないですか？。

KFA1：はい、でもまだぜんぜんその、調査の段階でもいかな
→JFA2：あーーー。 くー、

KFA2：で指導先生 といろいろな話をして わたしはすごくこー細かいところ、

JFA3：ああああ、うううん。

JFA4：ううん。

KFA3：調査は NG とか↑、（あー）こ・同じ 20 代の、

JFA5：うううん。

KFA4：こカップル とか、
→JFA6：うう ううん。

KFA5：30 代のカップル とかってい うふうに、どうすればいいですかみた

JFA7：ううううん。

JFA8：いなことを 先生に、ゆったら、

JFA8：ううううん。

JFA9：ううん。

<会話 21 >から分かるように、JFA2 と JFA6 は重ねられ手である KFA1 と KFA4 の話の

調子に合わせてできるだけ邪魔にならないように重ねられ手を配慮し、「あー」と「うううん」のあいづちとしてオーバーラップされてるのが分かるかと思う。なお、接触会話で日本人の一番多いパターンである「実質発話とあいづち」としてオーバーラップされているのである。これは、日本人同士と同様に、重ねられ手の話の調子に合わせて友好的に働き、重ねられ手発話の配慮的なオーバーラップ発話であると思われる。したがって、重ねられ手の話の調子に合わせて重ねられ手のネガティブ・フェイス（「自分の領域（テリトリー）を他人から侵されたくない」）により多くの注意を払うという、ポライトネス・ストラテジーをとっているのである。

<会話 29：KMA が JFB に日本語はやればやるほど難しいと話している場面>

KMA1: (舌鼓の音) 最初はあなんかあ・韓国語と似てるんじゃないですか (はいはい) だから、うふん、ま・きほん・あの日本語 (はい) をみると、あーやりやすいなと思って似てるから (うふん) もーウーフフフ 専門になってからは (h h) 難しくて。

JFB1: フフフ。

JFB2: あー そうなんですか。

KMA2: ハハハ。

KMA3: ハハハ。

JFB3: ウー フッ。

JFB4: 日本人でも日本語よく分かってない人、も私もですけど、 =

→KMA4: =すー ぎゃくに 韓国人もそうですよハハハ韓国語の## # # 思いますけどね。

JFB4-1: けっこう そうです かねーフフフフフフフフ. h h あはーなるほど。

KMA5: やっぱり文法の説明とかすると、あーそうだったけとか (ウフフフフ) 自分も韓国語教えながら (ハハハ) あはーハハハなるほど## # #。

JFB: ウハハハハハハハ . h h、えへーなるほど。

<会話 29 >は、JFB4 は KMA の日本語が難しいという話を聞いて、「日本人でも日本語よく分かってない人、も私もですけど、 = 」と相手に話を合わせているのが分かるかと思う。その JFB4 の話が中止されているのに、KMA4 は先取りして違うテーマに変えて自分の話を継続したため、起こったオーバーラップ発話である。その後、JFB4-1 が話を続けようと「けっこう」と発したけど、まだ KMA4 の話が続いたために、JFB4-1 は「そうですかねーフフフフフフフフ. h h あはーなるほど。」と重ねられ手である KMA4 の話の調子に合わせている。これも、重ねられ手の話の調子に合わせて友好的に働き、重ねられ手発話の配慮的なオーバーラップ発話であると考えられる。つまり、重ねられ手に調和して協力的に導くためのオーバーラップ発話を使っているのである。すなわち、重ねられ手のネガティブ・フェイスにより多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーをとっているのだ

ある。

したがって、日本人は相手が日本人であろうが韓国人であろうが「相手のテリトリーを守りながら接近する」という重ねられ手のネガティブ・フェイス（「自分の領域（テリトリー）を他人から侵されたくない」）により多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーを使っているのが明らかになった。

6. まとめ

本研究では、林（2010、2011）の結果⁷を踏まえて、日韓初対面接触会話でも同様な結果が出るのか考察した結果、以下のようなことが明らかになった。

(1) 日韓初対面接触会話でも日本語母語話者のオーバーラップ発話は、「あいづちとあいづち」と「あいづちが重なる系」のだけで42%を占めているのが見られた。これは、韓国語母語話者同士の場合より17%上回る結果となった。したがって、日韓初対面接触会話でも日本人は重ねられ手の話の調子に合わせて重ねられ手のネガティブ・フェイスにより多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーをとっているのが明らかになった。

(2) 一方、韓国人日本語学習者のオーバーラップ発話は、「あいづちとあいづち」と「あいづちが重なる系」が27%であり、日本語母語話者より15%も下回っていることが観察された。なお、オーバーラップされて日本語母語話者が中止されているのに、韓国人日本語学習者が話題を転換するケースが86回のうち1回、話題を拡大して展開するケースが10回に対して、日本語母語話者はというと、話題を拡大して展開するケースが1回あるものの、話題を転換するケースは見られなかった。しかし、母語話者同士の結果とはやや違い、「実質発話と実質発話」と「実質発話が重なる系」のパーセンテージは日本語母語話者より1%しか差が見られなかった。これは、日本語の学習をしているので、多少影響を受けたものと見られるものの、相変わらず、日本語母語話者よりは重ねられ手に対して積極的に働き、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話であると考えられる。

つまり、重ねられ手に対して積極的に働き、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話である。すなわち、韓国人は重ね手自身のポジティブ・フェイスにより多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーをとっていることになる。

(3) したがって、「初対面会話」⁸と「親しい友人同士の会話」⁹の母語話者同士間の結果を裏付ける結果となった。

⁷ 林（2010、2011）によると、日本人は重ねられ手の話の調子に合わせてできるだけ邪魔にならないように配慮するポライトネス・ストラテジーを、一方、韓国人は重ねられ手に配慮するのではなく、重ね手自身のポジティブ・フェイスにより多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーをとっているとしている。

⁸ 「初対面会話」におけるポライトネス・ストラテジーについての詳細は、林（2011）を参照されたい

⁹ 「親しい友人同士の会話」におけるポライトネス・ストラテジーについての詳細は、林（2010）を参照されたい。

参考文献

- 林河運. 2010. 「日韓友人同士会話におけるポライトネス・ストラテジー—オーバーラップ発話に注目して—」『外国語教育センタージャーナル』第5号, 島根大学外国語教育センター, pp.43-59.
- 林河運. 2011. 「日韓初対面会話におけるポライトネス・ストラテジー—オーバーラップ発話に注目して—」『外国語教育センタージャーナル』第6号, 島根大学外国語教育センター, pp.59-72.
- 宇佐美まゆみ. 2003. 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ : 以下, BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成13 - 14年度 科学研究費補助金 基盤研究C(2) : (研究代表者 : 宇佐美まゆみ), 研究成果報告書, pp.4-21.
- 都恩珍. 2003. 「発話の「同時発話 (Overlap) の類型化」」『日語日文研究』第44輯, 韓国日語日文学会, pp.1-20.
- 都恩珍. 2004. 「日常会話における同時発話—発話文類型に見る機能性—」『桜花学園大学人文学部研究紀要』第6号, pp.203-221.
- Brown, P. & S.C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bygate, Martin (1987) *Speaking*. Oxford University Press.
- Renkema, J. (1993) *Discourse Studies*, John Benjamin Publishing Company. 이원표 (1997) 옮김 『담화 연구의 기초』 한국 문화사
- Sacks, H. Schegloff E. A. and G. Jefferson. 1974. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation." *Language*50-4, pp.696-735.
- Schegloff E. A. & Harvey Sacks. 1973. "Opening up closings." *Semiotica*8, pp.289-327.